ポストコロナ時代を見据えた日本の伝統文化学習の創造
－青少年奉仕プログラム「座禅・お茶会」の実践事例－

岡村千恵子・岡村慶

高知大学学術研究報告　第72巻
抜刷（2023）

ポストコロナ時代を見据えた日本の伝統文化学習の創造
－青少年奉仕プログラム「座禅・お茶会」の実践事例－

岡村千恵子[1]・岡村慶[2]
（[1]京都外国語大学外国語学部・[2]高知大学教育研究部総合科学系複合領域科学部門）

Creating Japanese Traditional Culture Learning for the Post-Corona Era : A Practical Case Study of the Youth Service Program "Zazen and Tea Ceremony"

Chieko Okamura[1] and Kei Okamura[2]
[1] Kyoto University of Foreign Studies, Faculty of Foreign Studies;
[2] Kochi University Research and Education Faculty, Multidisciplinary Science Cluster, Interdisciplinary Science Unit

Abstract: This paper focuses on a case study of a youth service program, "Zazen and Tea Ceremony", developed and organized by a local non-profit organization, based on the premise of collaboration among schools, families, and the local community. This program was implemented in the spring of 2023, in view of the post-Corona era. We will analyze the characteristics of the program and discuss the creation and possibilities of Japanese traditional culture learning in the post-Corona era, based on our observation of the program on the day of its practice.

キーワード：学校・家庭・地域の連携，ポストコロナ時代，日本の伝統文化学習，
実体験の学び，自然と歴史と芸術
Keywords: Collaboration among School, Family, and Community,
Post-Corona Era, Traditional Japanese Cultural Learning,
Hands-on Learning, Nature, History, and Arts

1.はじめに

令和5（2023）年5月8日，わが国では，新型コロナウイルス感染症の位置づけがこれまでの「新型インフルエンザ等感染症（いわゆる2類相当）」から「5類感染症」となった．これにともない，コロナ禍（注1）以来，一般の社会生活や学校生活にもたらされたあらゆる制限が大きく緩和されることになった（注2）．突如として現れ容赦なく世界中に広がった新型コロナウイルスによる脅威（注3），わが国においてはおよそ3年間の行動制限が強いられる中で，安心・安全な暮らしを取り戻し維持していくための方法や価値観がこれまで模索されてきた．経済活動に直接関わる大人社会，ビジネス界においては，このコロナ禍の3年間で人々の働き方が実に多様化した（注4）．これと同様，学齢期の子どもを含む多くの学習者を抱える教育分野においても学習方法や学習環境の多様化が引き起こされた．その顕著な例は，2020年，新型コロナウイルスが猛威をふるう中，待ったなしの形で導入された遠隔授業やオンライン授業といったICT（注5）を用いた新しい学びの形である．コロナ禍以前には遠隔授業，オンライン授業などは多くの学習者にとって未経験かつ未知の学習方法であった．しかし，今日，それらは多くの学習者が経験済みの手近な学習方法として社会で受け入れられるようになってきた．そして，新しい技術の進展とともに常に更新され形を変えながらさらに普及しつつある（注6）．

また，こうしたコロナ禍の動きと前後しながら，わが国の小・中・高の学校教育においては，文部科学省によるGIGAスクール構想（注7）が進められ，子どもたちに一人一台の端末環境を整備することが目指される中，学校現場では今日，急速にICTの導入・活用が促進されている．社会の変化やグローバル化を背景にして，ICTを用いた学習や学習支援が今後も学校教育においていっそう広がることが予想されるが，そうした技術革新による新しい学びの形は，コロナ禍における緊急事態での活用実績から,条件さえ整えばいつでもどこでも活用できるという利点が証明された一方で，今後はそれに頼りすぎること，それを使いすぎることによる弊害や問題点についても考えてみる時期に来ているといっても過言ではないだろう．ICTを使えばヴァーチャルな世界が体験でき，家庭や学校に居ながらでも，美術館・博物館の展示など学術的に貴重な資料や情報にも端末画面を通して手近に触れられるようになった昨今（注8），子どもたちは日々のあらゆる学習体験の中で，実物にじかに触れる機会，現場まで出かけていって本物を体験する機会がますます減少傾向にあると思われる．以上のようなコロナ禍前後の社会の変化を考慮に入れると，これからの時代，すなわち，ポストコロナ時代（注9）に子どもたちが真に必要とする学習体験とはどのようなものだろうか．本稿では，学校・家庭・地域の連携を前提にして，地域の非営利団体が開発・主催した，青少年奉仕プログラム（注10）「座禅・お茶会」の実践事例（注11）をとり上げ，その特徴について分析するとともに，この実践の当日の観察記録（注12）から，ポストコロナ時代における日本の伝統文化学習（注13）の創造とその可能性について考察する．

2．青少年奉仕プログラム「座禅・お茶会」の実践事例

プログラムの概要　―主催団体によるプログラムの立ち上げと参加者の募集―

ここでとり上げる「座禅・お茶会」の実践事例は，地域（A市）に根ざして35年の非営利組織B（以下，「団体B」と呼ぶ）が主催する青少年奉仕プログラムであり，A市の教育委員会が後援することで，学校・地域・家庭を巻き込んで2023年春に実践されたものである．A市全域の公立中学校の対象生徒全員に学校を通して案内チラシを配布することで，このプログラム「座禅・お茶会」の周知が図られ，参加希望者が募られた．募集対象は，市内在住の中学1年生・2年生であり，その募集人員は30名であった．そして，この30名の生徒の募集に際して，募集要項に「保護者付添可」と記載することで，参加生徒の家庭から大人の参加者も同時に募られた．これは，「生徒とその保護

者」ペアでの参加（多くの場合，親子での参加）が歓迎され促進されたことを意味している．

次に掲げるのは，市内の各中学校で配布された参加者募集のための開催要項である（注14）．

1．団体Ｂが主催する青少年奉仕プログラムとは

団体Ｂは創立35周年を迎えます．創立以来，青少年奉仕プログラムの一つとして，地元の高校生を世界各国へ派遣し，派遣先国の高校生を迎え入れる青少年交換プログラムを実施してきました．このプログラムは１年間を通じての交換留学で，現在までに来日学生34人，派遣学生36人の実績があります．派遣候補生や留学生が体験した「座禅・お茶会」を市内中学の皆さんにも体験いただきたいと企画しました．

2．今回の「座禅・お茶会」の趣旨目的

座禅を通じて茶道，日本庭園，お菓子，踊りや舞い，日本食など日本文化に触れることを目的とします．茶道やおもてなしの精神や侘び寂びなど，美しい心得を感じられ，日本の礼儀作法や伝統文化を学べます．いくつもの芸術が融合した文化でもあります．

3.「座禅・お茶会」の開催要領

午前10：00　本堂にて，開会式・記念写真／座禅・お茶会の説明

午前11：00　プログラム開始予定　グループに分かれ，座禅とお茶会に順番にご参加

午後12：15　昼食を予定

午後13：15　プログラムを再開　グループに分かれ，座禅とお茶会にご参加

※　座禅はＣ寺の住職さんたちが指導します．

※　お茶会は私立Ｄ高等学校茶道部の皆さんにご協力いただく予定です．

※　服装は自由ですが，座禅であぐらを組みますので，座りやすい服装をおすすめします．

募集対象：Ａ市内在住の中学１年・２年生　30名（先着）別途，保護者付添い可

参加費：無料　食事・飲物はご用意いたします．

開催会場：　Ｃ寺　本堂

開催時間：　10：00〜15：45（会場集合時間　9：30　雨天決行）

申込期間：　2023年１月23日〜２月末日〆切

問合せ・申込先　　主催団体Ｂ事務局

後援：Ａ市教育委員会

以上が，青少年奉仕プログラム「座禅・お茶会」の開催要項である．

さらに，この開催要項のおもて面には，○月○日（日）という，このイベントの開催日と「参加費無料」という情報が大きめの目立つ文字で記載されている．そして紙面の中央部分には，墨字で「座禅・お茶会」と縦書きされている．その傍らに，この座禅・お茶会のイメージ画像（「畳の間で抹茶を点てる手元の様子，茶碗と茶筅」と「僧侶が座禅している後ろ姿」）が和風図柄とともにデザインされ，フルカラー印刷されている．紙面には次のキャッチフレーズも添えられている．「IT社会なればこそ，私は私の道を行く」．さらに「自然とのふれあい日本文化を学び，国際文化交流や人材交流を通じた青少年の育成を目的としています．広い視野を持ち，自分自身を見つめなおす機会

となるでしょう.」という簡潔なメッセージが示されている．A4 版サイズのコンパクトな紙面ではあるが，ポスター仕様のチラシには「伝統文化」を象徴する視覚的情報・文字情報を豊富に盛り込むことで，人々の興味・関心をひきつける工夫が十分に凝らされていた．チラシを手にとり，このイベントに興味・関心をもった生徒や保護者は，プログラムの参加・申込みを急いだにちがいない．

申込期間は，前掲の開催要項に記載のとおり「1 月 23 日から 2 月末日まで」である．申込期間が 1 か月以上という余裕のある期間設定がなされていたにもかかわらず，市内の全中学校から参加希望生徒が 30 名に達するのに実際には約 2 週間程度の期間しか要さなかった.募集人員に達した時点で，各中学校では，対象生徒の全保護者宛てに速やかに参加者募集締め切りの連絡を入れることが求められた（注15）．こうした参加者募集の段取りから締め切りまでの過程を見ると，市内全域という広範囲の地域から多くの生徒や保護者がこのプログラムに関心を示しており，「座禅・お茶会」は参加者募集が公開されるやいなや応募者多数の大盛況であったといえる．

3.「座禅・お茶会」プログラム参加希望者の応募要領　―その手続きと流れ―

主催者側，学校が参加者募集において担った役割については前述したとおりであるが，次に，参加希望生徒がこのプログラムへどのように応募・申込を行ったのか，その手順や手続きについて明らかにしておこう．プログラムへの参加希望生徒は，先の開催要項が印刷された案内チラシの下部にある申込用紙（必要事項を記入し，チラシに印刷の点線以下を切り取る方式）を各自，自分の所属する中学校へ提出，中学校は参加希望生徒からの申込用紙を団体 B に提出する，という手順で申込を完了する仕組みになっている．申込用紙に参加希望生徒が記載すべき必要事項は，「参加生徒氏名（ふりがな），性別，学校名，学年・組，同行される保護者の氏名，連絡先，申込年月日」である．この申込に関する一連の流れで注目すべきは，参加希望生徒が個人で直接，団体 B に申し込むのではなく，参加希望者は各自，自分の所属する中学校を通して，団体 B に申し込むという流れがつくられていることである．こうしたことから，参加者の決定については，後日，団体 B から（先着順にしたがって）折り返し，各学校に知らされることになっている．学校は，団体 B からその知らせを受け取ると，参加申込生徒とその保護者に対し，参加が希望どおり決定された旨を，団体 B が発行した書面（注16）を手渡すことによって知らせる，という手順で手続きが進められる．また，団体 B が発行した参加受付票には，「座禅・お茶会」のイベント前日までの問合せ先，当日の問合せ先など入念な連絡先が記載されている（注17）．参加受付票が発行されてからイベント当日まで数か月の期間中に参加予定者の質問に直接，団体 B がいつでも応える体制がつくられていることは，主催者側の配慮ある親切な対応・取り組みであり，参加する側にとっての安心感に結び付く．

以上に見てきたように，この「座禅・お茶会」の実践事例では，学校・地域・家庭の連携を円滑に運ぶための入念な仕組みと流れがつくられている．つまり，主催団体の，時間的に余裕をもった丁寧で細やかな情報発信は，参加者側の高い学習意欲と積極性，そして準備性，安心感を促したといえる．また，主催団体と参加者の仲介役を担う学校や教育行政組織の確実な行動と両者への働きかけは,安心の中で新しい学びのフィールドを用意する可能性を拓いたといえる.以上のことから，この実践における「地域・学校・家庭の連携」の特徴とは，次のようにまとめることができる．①長年の経験を生かし地域の教育に社会貢献を申し出る主催団体，②主催者と学習者を結ぶパイプ役を担う学校および教育行政当局，③地域を舞台にした体験活動の趣旨に賛同し未知の学びに積極的になる学習者とその家庭，といった，挑戦的な学びに主体的に参画しようという意志と意欲をもつ三者，①②③を緊密につなぐ円滑な教育枠組みの創出こそが，この実践の特徴といえる．

さて，この実践の参加者募集から参加者決定の流れや仕組みは，案内チラシという紙媒体の連絡手段や，人と人が直接的に情報を手渡し，確実に対応する従来どおりのコミュニケーションの方法

に加え，ICT を通じて速やかに大多数に連絡を伝える現代的な方法をバランスよく共存させることで三者の連携を円滑に運んでいた．コロナ禍では人と人の対面の機会が急激に減り，それを補う方法として ICT を駆使した対人関係や学習方法のニーズが高まった．今日，そうした時期を乗り越えて，ポストコロナ時代を進んでいく中では，コロナ禍で偏重された新しい方法への過度の傾倒を見直し，従来どおりの伝達手段や伝統的な方法の有効性・利点についてもこの機会に再評価していく必要がある．従来からの人対人の伝統的なコミュニケーションの方法と，ICT を用いたコミュニケーションの方法とを組み合わせて有効活用することで，教育実践をより円滑に運ぶ方法を見出していくことが，今後は重要となってくるであろう．

4.「座禅・お茶会」当日の流れとその全体像

「座禅・お茶会」の開催場所は，市内中心部からバスや車で山手に約 20 分，山間部に位置する千年以上の歴史をもつ寺院で行われた．このイベントの当日，朝 8 時 30 分には団体 B のスタッフがお寺の本堂前に集合していた．スタッフは「座禅・お茶会」の参加者受付が始まる午前 9 時 30 分までの約一時間の間，このイベントの開催準備を手分けして行っていた．立て看板や案内表示を設営する者，受付用テントや受付台を運び設置する者，受付での参加者名簿を準備する者，お寺の入り口や周辺の要所に立って参加者の誘導・案内する者など，会場の入り口周辺にはこの一大イベントのために数多くのスタッフがそれぞれの役割を担っていた．彼らは皆，団体 B のスタッフであることが会場に来た参加者から見て一目でわかるように,皆同じ色のビブスと同じ色のキャップ(帽子)を着用していた．参加者たちは市内一円の広域から集まってくる．参加者たちの交通手段や寺までの所要時間は個々にそれぞれに異なっている．ほぼすべての参加者にとって，会場となった寺院周辺は普段の生活圏とは異なり，森林に囲まれた人里離れた地域である．集合時間の朝 9 時 30 分になる前に，参加者たちは少し時間に余裕をもって集まってきた．そして，ほぼすべての参加者が「親子のペア」での参加であった．子どもと大人あわせて，おおよそ総勢 60 名の参加者が集まった．彼らはその山深い会場に到達すると，案内看板などの助けもあり，周辺状況については十分に理解できた．しかし，何か不明な点がある場合などは，ビブスを着たスタッフに参加者が声をかけている姿もあった．

参加者の受付がすべて終了すると，彼らは全員，お寺の大広間に案内され，その日，一日のスケジュール確認も兼ねて，このプログラムの開会式が催された．そこでは，まず団体 B の総責任者から挨拶があり，その日の「座禅・お茶会」の開催趣旨が語られた．団体 B の沿革やこれまでの活動報告とともに，このプログラムを立ち上げた経緯も併せて紹介された．参加者たちは開会式で語られた団体 B の熱意に触れ，その日のイベントを主催者と共に成功させたいという前向きな気持ちが掻き立てられていた．そして同時に，多くの参加者は自らの学習意欲の高まりを感じていた．会場のお寺は森林の中に建立され，豊かな大自然に囲まれている．これから始まる学びは，大自然の中で展開される．お寺の大広間の縁側には大きな窓があった．その窓からは，お寺の別棟の屋根と山々の峰がつながる景色が見えていた．参加者たちは，主催者側の挨拶（スピーチ）を聴き，これから体験する大自然との融合から醸し出される学びを想像していた．それは，参加者が未知の学びを体験できる喜びや期待を感じた瞬間でもあった．そしてこの後，参加者が体験することになる「座禅の説明」と「お茶会の説明」があった．それぞれ各 10 分程度の説明であった．座禅の実践指導は，お寺の住職や僧侶が担当し，お茶会の実践指導は，団体 B が協力を依頼している私立高校の英語教諭（茶道部顧問）と茶道部の高校生が担当するとのことであった．茶道部の顧問からの挨拶と自己紹介があり，その後，参加者は午前中の体験活動に参加するために二つのグループに分けられた．一つは座禅を体験するグループ，もう一つはお茶会を体験するグループである．これによって，午

前の部のそれぞれ「座禅・お茶会」の体験活動が開始された（注18）.

（1）座禅

座禅を体験するグループでは，約 30 人（15 組程度）の参加者が，座禅をする場所として，お寺の渡り廊下に案内された．参加者は渡り廊下に到着すると，そこに腰を下ろし，直接，お寺の住職と僧侶から座禅のやり方を教わることになった．中学生は中学生だけで集まって一列になり，それに続いて大人は大人だけで集まって一列になり，そしてそのまま全員，渡り廊下で一旦，腰を下ろすことになった．長い渡り廊下では参加者全員を前に，まず住職がこれから体験する座禅の説明を行った．そして，いよいよそれを参加者が実践する場面になると，住職のほか，二人の若い僧侶たちも助言に加わった．僧侶たちは参加者の間を巡回しながら，参加者に適宜，親切に声かけをした．このようにして座禅の実践指導が行われた．そして参加者は皆，まずは住職や僧侶たちが説明したとおりに，あぐらを組む動作を試みた．しかし，多くの参加者にとってそれは思いの外，簡単ではなかった．日常生活であぐらを組んで座る習慣をもつ参加者でさえも，いざ説明を受けて座禅を組むとなると，あぐらを組むとはどういう動作なのか半信半疑の様子であった．参加者はそれぞれ，住職や僧侶たちからの助言を聴いて，あぐらを組みはじめた．約 30 人の参加者たちがあぐらを組んで座ると，長い渡り廊下で，人の列はおおよそ 30 メートルぐらいの長さになり，横並びでの座禅の一列ができた．参加者のほとんどが初めての座禅体験であった．皆，戸惑いながらも終始一貫して真剣に座禅に取り組んだ．しかし，全員で揃って一斉にあぐらを組むということは意外にも難しかった．すぐに上手に組める者もいれば，そうでない者もいる．しばらくして参加者全員が揃ってどうにかあぐらを組めたところで，次に，座禅を組んで座り続けるコツを住職や僧侶たちから教えられた．それは，あぐらを組んだ状態で，次のいくつかの動作を試みることである．姿勢を調え，呼吸を調え，目を閉じて，心を無にして，手は前で組み，ただひたすら座るという座禅の基本的な姿勢と方法である．参加者は皆，そのような姿勢と方法をその場で身をもって体験し実践的に学んだ．住職は，この座禅のやり方で 15 分，そのまま雑念なく姿勢を正して呼吸を調え，あぐらを組んで座り続けることを参加者に体験してほしいと語った．住職によれば，この 15 分間座禅を組む体験をやってみることで，座禅とはどのようなものか，おおよそのことはわかるとのことであった．そして，参加者全員揃っての，15 分間の座禅体験が開始された．

座禅を始めてしばらくすると，それはなかなか厳しい体験であることがわかる．例えば，眠気に襲われて身体が自然と傾いてくる，あるいは，正しい姿勢のまま座ることが辛くなる場合がある．僧侶は，「警策」という長い棒で，眠気などで姿勢が崩れかけている参加者の肩を軽く叩く．肩を警策で叩かれた参加者は，その瞬間，ふと正気をとり戻し眠気から覚めることができる．そして，呼吸や姿勢を調え，座禅を立て直す機会を得る．こうして，お寺の渡り廊下で 15 分間，参加者たちは座禅体験を経験した．

この 15 分間の座禅体験とは，参加者にとってどのようなものであったか．参加者たちは，この体験で何を学んだのだろうか．最初，参加者たちの多くが，15 分程度の短い時間ならば，正しい姿勢のままあぐらを組んで座り続けることは自分にできるのではないかと思っていたことだろう．しかし，中学生もその保護者も皆真剣に取り組んだからこそ，この体験から学んだことは，15 分間，座禅を続けることは意外にも難しいということであった．実際にやってみてこそ初めてわかるという体験は，大人にとっても子どもにとっても貴重な経験である．つまり，それは，どんなことでも，やってみなければ何もわからないということである．これは，人間の営み全般に当てはまる教訓といえるだろう．人間は日頃，内容を十分に吟味せずに見た目で判断したり，根拠のない思い込みに知らず知らずのうちにとらわれているところがある．15 分間の座禅体験は，他にもいろいろなことを教えてくれる効果があったが，まずは，人間のそうした拙い思い込みに気づく体験であったとい

える．こうした教訓を子どもだけが学ぶのではなく，大人も子どもも共に実体験を通して学んだということがこの実践の大きな収穫といえる．

15分間の座禅が終わると，参加者は皆，緊張から解放されてリラックスした気持ちになっていた．かすかな風が渡り廊下を吹き抜ける．お寺の渡り廊下の空間は，自然や歴史の融合が織りなされていた．渡り廊下から周囲の景色を見下ろすと，お寺の敷地内に生き生きと生育する新緑の木々の間を，山岳信仰の山伏の姿をした行者が二人，三人と，地面をしっかりと踏みしめながら歩く姿があることに気づく．耳を澄ますと，鳥の声も聴こえてくる．このような自然豊かな場所での貴重な体験活動に，大人も子どもも参加者たちは，身体や心を癒され，その学びの深さに驚かされた．

（2）お茶会

午前の部では，座禅と同時並行で，また別の参加者グループがお茶会に参加する（注19）．お茶会は，お寺の和室で行われた．参加者グループは案内されて，大広間からお茶会の会場である和室へと移動する．お寺の渡り廊下を渡り，お茶会会場の和室へ到着すると，和室ではすでにお茶会の準備が整えられている．着物を着た茶道部の顧問が和室の入り口で，参加者グループを迎え入れた．和室では，茶道部の部員である高校生たち（注20）がお茶の準備，お菓子の準備を整えている最中であった．参加者の中学生は，和室に入ると畳の上に正座して，お茶会が始まるのを待つ．お茶会では保護者は，和室入り口から子どもがお茶会に臨む姿を見学することになっていた．お茶会が始まるにあたって，茶道部顧問による，茶道具や茶道に関する手短な説明があった．短時間での説明だが，どれも実物を見ての説明なので，わかりやすい．また，茶道で必要とされる座り方，正座やお辞儀の仕方など，基本的所作を実践的に習った．そして，説明の後，畳の上に正座する中学生に，お菓子をのせる皿の代わりとなる，白無地の懐紙と黒文字と呼ばれる菓子楊枝が配られた．中学生は，まず懐紙の使い方として，懐紙を二つ折りにすること，二つ折りにした「わ」になった方を自分の方に向けて畳の上に置くことなどを習った．このとき，畳の縁（へり）の上には，懐紙を置かないことが正しい作法であることも教わった．そして，お茶会の亭主から「お菓子をどうぞ」と勧められた際には，お辞儀をして，お菓子の一人分を（自分の）懐紙に取ること，その後，次の客（隣の参加者）に「お先に」と一言挨拶をしてからいただくことなど，お茶会での基本的なマナーをいくつか事前に教わった．また，今回のお茶会のように，招かれた客人が何人か居る場合，お菓子をいただく際には，最初にお菓子をいただく客は，菓子器の真ん中に盛り付けられたお菓子をいただくのではなく，その周囲にあるお菓子からいただくことなど，他の人への配慮の心なども学んだ．これは，最後に菓子をいただく人が，端の方に残った菓子（残り物）を取るような形にならないようにという思いやりの心である．このように，参加者の中学生は皆，茶道の作法や基本的な知識を教わりながら，茶道とは何か，茶道とはどのようなものか，真剣な表情で自ら探求している様子であった．

この後，お茶会は実践的場面へと移っていく．茶道部の高校生が中学生の人数分のお菓子を盛り付けた菓子器（陶器の少し深めの鉢）を両手に，注意深く，参加者の中学生のところまで持ち運ぶ．菓子器には，色や形の美しい風情ある和のお菓子と黒文字（注21）が用意されている．お菓子を運んできた高校生が，客人体験をしている中学生の前に，正座をしてお辞儀をする．正座した中学生もまたお辞儀をする．中学生たちはその場の厳かな雰囲気を味わいながら，そして少し緊張気味に，一人ずつ順番に，黒文字でお菓子を懐紙の上に取り，事前に学んだ作法のとおりにお菓子をいただいた．中学生たちがそれぞれ懐紙の上にとったお菓子は，色彩豊かな美しいお菓子であった．薄桃色で丸みを帯びた菊をかたどった饅頭，それは真上から見ると花の中心には小さく黄色い花粉もさりげなく彩られている．そして，鮮やかな水色を基調とする朝顔風の花をかたどった寒天菓子，これには白や黄色の砂糖で繊細な細工も施されている．それと同デザインの色違いの鮮やかな桃色を

した寒天菓子．そして，素朴な淡い黄土色をした稲穂をかたどった小さな落雁など．それらは，どれも日本の四季折々の趣を感じる和菓子であった．中学生の参加者は皆，3種類（饅頭，寒天菓子，落雁）すべてを懐紙にとるように予め伝えられていたので，中学生はそれぞれに3種の菓子を自分の懐紙に取り，その色とりどりのお菓子を眺めながら心穏やかな様子でいただいた．

お茶会ではお菓子の次に，お茶が運ばれる．和室の隅，床の間の前に鉄製の黒っぽい釜や柄杓（ひしゃく）が用意され，お湯が沸かされている．その傍らでは正座をした茶道部の高校生が，朱色の帛紗（ふくさ）を手に，茶杓や茶器を清め，その後，茶碗に抹茶を点てはじめた．そして，朱色の帛紗を腰の位置につけている別の茶道部員の高校生が，中学生のところへ一つずつお茶を持ち運ぶ．中学生は，お茶が運ばれると，お菓子の時と同様に，隣の参加者（中学生）に「お先に」と挨拶をした（注22）．そして，ここでは，お茶が運ばれたら亭主に「お点前ちょうだいいたします.」と挨拶をしてからお茶をいただくことを習った．参加者の中学生たちは，正座をしたまま，少しぎこちない様子で，両手で茶碗をもって行儀よくお茶をいただいた．

お茶をいただくときの一連の動作としては，「茶碗の正面からいただくことをさけるため，右手で手前に2度まわして静かに味わいながらいただく」や「飲み終わった後で，人差し指と親指で飲み口を清め，その指先を懐紙で清め，茶碗を手前から向こうへ2度まわして元に戻す.」（注23）など細やかな作法や心得があるようだが，初めてお茶会を体験する中学生たちに対する配慮から，このお茶会では，厳しく細やかな作法の実践は求められなかった．茶道部の顧問は，終始穏やかに中学生に語りかけ（注24），親しみやすい雰囲気でお茶会へ参加するにあたっての基本と要点を伝えていた．この機会を通して，お茶会を初めて体験した中学生にとっては，お茶会という，日本文化の実践的場面での新しい知識や所作は，日常と少しかけ離れた目新しい学びになったに違いない．

5．青少年奉仕本プログラム「座禅・お茶会」で学ぶ日本の伝統文化とは

「座禅・お茶会」プログラムの当日の流れや要点は前述したとおりであるが，この日は，天候にも恵まれ，ちょうど桜の花が満開であった．寺院の境内や敷地内には，満開の桜の花と深紅の椿がいたるところに見事に咲き誇っていた．当日，参加者たちはこの山深いイベント会場に到着した瞬間，思いがけず出会ったこの季節ならではの自然の美しさに感銘を受けていた．それは都会の街路樹や公園で偶然見かける桜や桜並木の美しさとは明らかに異なっていた（注25）．彼らは，無論，この場所にお花見を目的に訪れたわけではなかったが，そこで偶然にも満開の桜の花に出会ったのである．それはまさに「一期一会」（注26）のおもてなしに出会ったといえる．予め団体側から伝えられていた集合時間より少し余裕をもって訪れた親子は皆，このプログラムの受付が始まるまでの間，花を見上げたり，花に近づいてそれを写真に収めたり，花を背景にして自分たちの写真を写したり，その周辺を散策したりして心を和ませ楽しんでいた．

さて，この日，一日のすべての体験を通して，参加した中学1，2年生たちはこのプログラムから何を感じ取ったのだろう．そして，参加した保護者たちは何を感じ取ったのだろうか．何よりもまず，この「座禅・お茶会」プログラムで経験したことを話題にすることで，対話が生まれたのではないだろうか．例えば，プログラムに参加した親子間であれば，この日の帰り道，率直な感想を述べあったりするのは自然の流れである．また，この日の夕方，参加した親子が家路に着き，このプログラムに同行しなかった他の家族（例えば，父，母，兄や姉，妹や弟，あるいは祖父母など）に今日の出来事や感想を話すことでも何らかの対話が生まれるであろう．さらに，次の日になれば，家庭内の対話にとどまらず，参加者たち（保護者・中学生）は，それぞれの友人や仲間たちにこの日の体験や感想を語ることもあるだろう．この「座禅・お茶会」プログラムでは，このようにして伝統文化への興味・関心の輪が人づてに広がっていくことも期待されているといえる．

伝統文化に関する話題を他の誰かと共有することは，伝統文化学習の魅力や面白さを他者に広める機会になるだけでなく，自分自身の中で深化させる機会にもなる．そうした対話をきっかけとして，対話の当事者たちは，伝統文化の未知の部分をもっと知りたいという衝動に駆られることもあるだろう．その先にあるのは，探求心が動かす深い学びである．参加者が座禅やお茶会で習ったこと教わったことは，日本の伝統文化の技芸であり，日本で古くから受け継がれ大切にされてきた文化遺産といえる．また，そこには様々な日本の伝統的な風情が息づいていた．参加者は，このプログラムを通じて,こうした文化遺産はもとより,その周辺にちりばめられた,さまざまな芸術(注27)に触れる体験をしたということができるだろう．参加者たちが，この「座禅・お茶会」プログラムで学んだことは，自然や歴史との融合が織りなす総合芸術ということができる．

6．むすび

心と体の相互一体感が，学びを深化させる効果をもたらす．古代の格言が言うように「健全な精神は健全な肉体に宿る」．アメリカの文献によれば,「栄養面での健康，運動，よい睡眠の習慣，リラクゼーションとマインドフルネス・トレーニング（mindfulness training)，運動競技などを学ぶ機会をもつことは,すべての学びや動機づけ,自己啓発に良い影響を与えることがわかっている」[1]．そして，私たちの精神は身体と複雑に関係しているので，そこにフィードバック・ループがあることを認識し，精神と身体のどちらの面も軽んじないことが大切であるという[2]．

この「座禅・お茶会」プログラムに参加したある中学生は，このプログラムでの体験について「森林に囲まれたお寺はとても静かな場所だったので，とても清々しい気持ちで座禅とお茶会の体験に集中できた」と語っている．中学生が言うように，確かに，静寂さは集中力を鍛えてくれるし，静寂さゆえに聞こえる音がある．例えば，鳥の鳴き声，葉っぱの揺れる音，木々のざわめき，せせらぎが流れる水の音，風が流れる音，小さな虫が飛ぶ音など，自然がつくりだすかすかな音にも気を留める．また，そこでは普段の生活では決して聞くことのない音も聞こえてきた．時折，山伏がホラ貝を吹く音が鳴り響く.お寺の渡り廊下の移動中には,皆で床を歩く足音さえも珍しい.それは,まさに自然の静寂の中で耳を澄ます体験であり，都会では聴こえない音を聴く体験であったといえる．

約３年間のコロナ禍を経てポストコロナ時代に突入した今日，社会にはICTを用いた技術開発やアイディアが溢れており，あらゆる疑似体験を手軽に享受できるようになってきた．最近では，さまざまな最新技術を駆使することで仮想現実のなかで“没入感”に浸れると謳う「イマーシブな体験」を売りにした美術展なども商業ベースで人気を博しているという．エンターテインメント業界の話なので，観客は娯楽だと割り切って楽しんでいると言われれば，それまでであるが，コロナ禍を契機として本物ではない体験や疑似体験で満足する人が増える傾向にあるように思われる．ますます加速するデジタル社会の中で，仮想現実に身を置くことで，自分が本当に体験したような錯覚に陥るようなサービスが増える中，自ら現場に体験しにいく，実物に触れる，という本物から得られる深い学びこそがポストコロナ時代にはますます求められていくものと思われる．そういう意味で，本稿でとり上げた実践事例は，ポストコロナ時代のさきがけとなる，伝統文化学習の創造とその可能性を提示しているといえる．本稿の考察では，主催団体の長年の経験知を生かしたコーディネート力の高さによって実現した「伝統文化学習」の創造の一側面を知ることができた．また，こうした主催団体の存在が，地域の公教育を活性化する役割を担う可能性をもっていることも発見であった．筆者の今後の課題としては，このような地域発の伝統文化学習の実践を学校教育という枠組みの中で，いっそう密に結び付けていくためのより実践的な方法論（注28）と，同様の文脈の中で学校教育が果たすべき役割についての考察である．

注

（注1）　本稿における「コロナ禍」とは，わが国で第1回目の緊急事態宣言が出された2020年4月7日から，新型コロナウイルス感染症の位置づけが「2類相当」から「5類感染症」へと変更となった2023年5月8日の前日，2023年5月7日までを指して，そう呼ぶこととする．

（注2）　制限が緩和されたことによる大きな変化の一つとしては，マスクの着用ルールが挙げられる．厚生労働省によれば，「これまで屋外では，マスク着用は原則不要，屋内では原則着用」としていたところ，「令和5年3月13日以降，マスクの着用は，個人の主体的な選択を尊重し，個人の判断が基本」とし，「本人の意思に反してマスクの着脱を強いることがないよう，配慮」するようこれまでの制限を緩和した．ただし，今後も社会の場面に応じては，周囲の人に感染を広げないためにマスクを着用する，自分自身を感染から守るために，マスクは効果的であることも同時に伝えている．（厚生労働省ホームページ参照：2023年9月20日，閲覧．）
https://www.mhlw.go.jp/stf/corona5rui.html

（注3）　「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は，2019年12月初旬に，中国の武漢市で第1例目の感染者が報告されてから，わずか数カ月ほどの間にパンデミックと言われる世界的な流行となった」ことは私たちの記憶に新しい．「わが国においては，2020年1月15日に最初の感染者が確認された後，5月12日までに，46都道府県において合計15,854人の感染者，668人の死亡者が確認されている．」（NIID国立感染症研究所ホームページ参照：2023年9月20日，閲覧．）

（注4）　地域差や業種差はあるものの，わが国ではコロナ禍の影響によりデジタル活用が進み，民間企業などでテレワークの普及が拡大した．特にコロナ禍の緊急事態宣言時にテレワークの活用率は上昇傾向にあった．（総務省ホームページ参照：2023年9月20日，閲覧．）
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/html/nd123410.html
コロナ禍が始まって以降，テレワークの活用率は，社会におけるコロナ感染状況などによって上昇や減少を繰り返してきているが，東京都の調査によれば，2023年現在も（6月の調査結果）都内企業において一定割合はテレワークを活用している実態が2023年7月11日に報道発表されている．（東京都ホームページ参照：2023年9月20日，閲覧．）
https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2023/07/11/11.html

（注5）　ICTとは，Information and Communication Technologyの略で「情報通信技術」を指す．

（注6）　2020年4月以降，新型コロナウイルス感染拡大により対面授業が懸念されるなか，わが国では多くの大学で遠隔授業，オンライン授業が実施された．2020年5月に実施の内閣府が行った調査では，95.4パーセントの大学生・大学院生がオンライン教育（授業）を受講したと回答している．（総務省ホームページ参照：2023年9月10日，閲覧．）
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/html/nd122230.html
他方，小学校・中学校・高等学校では2020年3月2日から順次臨時休業となる中，この休業期間中に「遠隔オンライン教育や授業」を行った公立学校は，特に小・中学校で顕著に少なかった．同期間中に「同時双方向型のオンライン指導」を行った学校は，小学校で8パーセント，中学校で10パーセント，高等学校で47パーセントである．また，臨時休校中に「教育委員会作成の動画の活用」や「上記以外のデジタル教材を活用」した小学校・中学校・高等学校の割合は，前者の活用が2割から3割程度（小22%，中23%，

高 30%），後者の活用は 3 割から 5 割程度（小 34%，中 36%，高 51%）となっている．数値データは文部科学省（令和 2 年 6 月 23 日時点）の調査による．（総務省ホームページ参照：2023 年 9 月 10 日，閲覧．）
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/html/nd122210.html
コロナ禍をきっかけとして，学校における ICT の活用は今日，必須のものとなっている．また，不登校の児童・生徒を教室の授業へ呼び込み，遠隔・オンラインでの授業参加を実現するなど，かつてない新しい取り組み例やその成果がコロナ禍において数多く報告されるようになった．さらには公教育の枠を超えたところ，例えば，民間の学習塾などで，小・中学生や高校生が，自分の家と塾の教室とを結ぶ，遠隔授業やオンライン授業に参加する機会が増えたのも 2020 年のコロナ禍以降のことである．

（注7）　Society 5.0 時代に生きる子供たちにとって，PC 端末は鉛筆やノートと並ぶマストアイテムであること，今や，仕事でも家庭でも，社会のあらゆる場所で ICT の活用が日常のものとなっていること，社会を生き抜く力を育み，子供たちの可能性を広げる場所である学校が，時代に取り残され，世界からも遅れたままではいられないことから，「1 人 1 台端末環境は，もはや令和の時代における学校の『スタンダード』である」として，「これまでの我が国の 150 年に及ぶ教育実践の蓄積の上に，最先端の ICT 教育を取り入れ，これまでの実践と ICT とのベストミックスを図っていくことにより，これからの学校教育は劇的に変わ」ることに期待を寄せて，令和元年（2019 年）12 月に文部科学大臣が新しい時代の教育改革について国民へメッセージを公表している．（文部科学省ホームページ参照：2023 年 9 月 20 日，閲覧．）
https://www.mext.go.jp/content/20191225-mxt_syoto01_000003278_03.pdf

（注8）　アメリカでは，2020 年春，新型コロナウイルス感染拡大の緊急事態のさなか，全米ミドル・レベル教育協会（AMLE）がミドル・レベルの子どもたち（いわゆる，小学校 4 年生から中学 2 年生相当の子どもたち）対してコロナ禍における遠隔学習リソースとして世界の美術館・博物館 12 館を仮想訪問する学習方法をいち早く紹介した．コロナ禍初期の外出制限があった時期の学習方法として注目に値する．この詳細に関しては，次の拙稿を参照されたい．
岡村千恵子・岡村慶「2020 年新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策期がもたらす学習観のパラダイムシフト―全米ミドル・レベル教育協会（ALME）が推奨する遠隔学習リソース：「芸術」主題に着目して―」，『高知大学学術研究報告　第 69 巻』，15－26 頁，2020 年．

（注9）　本稿における「ポストコロナ時代」とは，わが国でコロナ禍の一つの節目となった，感染症法上の位置づけが変更された 2023 年 5 月 8 日以降の時代を指すものとする．そういう意味では，2023 年 9 月現在，未来に向かう現在進行形の時代を指して「ポストコロナ時代」と呼ぶことができる．しかし，現在のところ，いまだその終点は見つかっていない．

（注10）　「青少年奉仕プログラム」とは，もともとアメリカ由来のプログラム名称である．アメリカでは「サービス・ラーニング」（以下，「S・L」と表記）と呼ばれる，若者とコミュニティとを結びつける学習活動が 1990 年前後から盛んに行われている．「青少年奉仕プログラム」とは，このアメリカの S・L に源流をもつプログラム名称である．アメリカのサービス・ラーニングの定義やその概観についての解釈は次の拙稿を参照されたい．

岡村千恵子「アメリカのミドル・スクールにおけるサービス・ラーニングに関する一考察―より高次の学習活動を指向するカリキュラムの展開過程―」『カリキュラム研究　第12号』，日本カリキュラム学会，2003年，97－112頁．

（注11）本稿でとり上げる実践事例の開発・主催者は，本稿2．で示すとおり，地域で長年，社会貢献活動を展開してきた非営利組織である．そしてその源流をたどれば，アメリカで発祥の社会貢献を目指すボランティア団体であり，アメリカにおけるその活動実績は1世紀にわたる歴史をもつ．アメリカのこの団体が目指す重点分野として，平和の推進，教育の支援，地元経済の成長，環境の保護などがある．団体では，職業人と地域社会のリーダーのネットワークを通じて，人びとに奉仕する活動を長い歴史の中で多岐にわたって続けてきている.本稿でとり上げる実践事例は,ポストコロナ時代を眼前に控えた2023年4月に，日本のある地域で展開された実践事例である．2023年4月といえば，わが国では期待と不安が入り混じる中，世間全体がポストコロナ時代の到来を確実に意識していた時期である．しかし，コロナに禍よる制限はまだ緩和されていない時期であった．本事例はそうした状況下での実践であり，プログラムの進行や実践に関わる者のマスク着用は必須であった．

（注12）青少年奉仕プログラム「座禅・お茶会」の当日の観察記録は，このイベントの開催当日，筆者が現場まで赴いて，実践の詳細を確認・観察したフィールドワークの記録である．主として，本稿，本文中の4．5．にその当日の観察記録が反映されている．

（注13）地域における「伝統文化学習」という題材について，筆者は次に掲げる拙稿でもとり上げた．その中で，いくつかの先行研究をもとにして，伝統文化学習を学校教育の中で行うことの難しさやジレンマ，そしてその背景について整理し言及した．
岡村千恵子・岡村慶「子どもの学びを豊かにする地域における芸術文化活動―伝統文化お箏三味線親子教室を事例として―」，『高知大学学術研究報告　第68号』，2019年，1－8頁．

（注14）団体Bが作成・公表した実際の開催要項（配布された参加者募集チラシ）には，4つの固有名詞が使用されているが，本稿では開催要項の内容に関しての要点把握を目的とすることから，固有名詞は記載せず，実際の表記の一部を改変して，「団体B」，「C寺」，「私立D高校」「A市教育委員会」と表記した．

（注15）学校から，募集対象生徒の全保護者宛てに，次のような主旨・内容のメーリングリストが発信された．「『先日募集いたしました座禅・お茶会プログラムに予想を上回る参加希望者の応募があり，申込終了を待たずに応募を締め切ることとなりました』という連絡が主催者側から入りました．これにより，座禅・お茶会プログラムの今後の申込の受付はできません．ご了承ください.」参加者の募集は，このようにして締め切られた．

（注16）ここでの書面とは，参加受付票，ならびに「座禅・お茶会」当日のスケジュールや会場への行き方，アクセス方法などの詳細を記載した一連の案内文書を指す．

（注17）また，団体Bが発行した参加受付票には，「受付内容について質問・疑義等がある場合はお申し出ください.」や「ご不明な点がありましたら，下記までお問い合わせください.」といった，団体Bへの直接の連絡を歓迎する参加者への配慮の言葉も記載されている．

（注18）昼食を挟んで，午後の部では，次のようなスケジュールが組まれた．午前中に「座禅」を体験したグループは，午後には「お茶会」を体験し，午前中に「お茶会」を体験したグループは，午後には「座禅」を体験する．つまり，午前と午後の両方で，すべての参

加者が「座禅」と「お茶会」の両方どちらも体験できるように段取りが組まれた.

（注19）お茶会では，1グループを「5～6人の中学生とその保護者」という単位で分けられた. 午前の部のお茶会は1グループが体験し,午後の部のお茶会では,5グループが体験した. 各グループのお茶会の参加時間は,各20分である.お茶会では,中学生のみが体験をし, その保護者は和室入り口の廊下から見学のみであった.

（注20）高校生たちは，着物ではなく，学校の制服を着用していた.

（注21）黒文字とは,クスノキ科の枝を削って作った茶道具の一つで,ここでは箸のような道具.

（注22）このような決まり言葉である挨拶のタイミングや所作などは，初心者の中学生が一度説明を聞いて覚えきれるものではなかった．中学生は，必要に応じて促してもらいながら，茶道を学んでいた.

（注23）例えば，裏千家ホームページでは,「薄茶のいただき方」など本格的な作法や流儀が紹介されている.（裏千家ホームページ　閲覧日：2023年9月11日）
https://www.urasenke.or.jp/textb/shiru/beginer/nomu.html

（注24）茶道部の顧問はマスクを着用していたが，笑顔で中学生に話しかけていることが，声の調子や目の表情から十分に伝わってきた.

（注25）桜の花はそれ自体が美しいので，都会で見ても山深い場所で見ても美しいのであるが，都会で見る桜は，人工物（人工的に造られた土手や道路，現代的な建物など）と調和する美しさである一方，人里離れた山深い場所で見る桜は，自然の中に溶け込み調和する美しさである．そこにはお寺という人工物もあるが，それは，都会で見かけるような現代的な形や色の建物ではない.歴史を刻んだ伝統文化を具現化した建物である.両者を比較すると，それらは質の違う美しさといえる.

（注26）茶道の一流派である裏千家によれば，初めてお茶を学ぶ人に対して,「はじめてのお茶」と題して，次のような茶道のおもてなしの心について伝えている.「茶事・茶会に客を招く際，楽しんでもらえるようにあれこれと思いを巡らせます．人を楽しませることは，簡単なようで案外と難しいものです．いろいろ準備したもので，招いた者（亭主）と招かれた客の心が通い合うと,とても心地のよい空間が生まれます.このことを茶道において「一座建立（いちざこんりゅう)」という言葉で表現します．また,「一期一会」という言葉があります．一期は一生，一会はただ一度の出会いを表します．稽古でも茶会でも，日常においてもその瞬間は二度と巡り会えないものであるという教えです．亭主も客も相手を思いやる気持ちが何より大切です．そのような気持ちを持って，まずは楽しく一服のお茶を楽しむことが良いかと思います.」(裏千家ホームページ参照.閲覧日:2023年9月10日）
https://www.urasenke.or.jp/home/textb/shiru/beginer/

（注27）「茶のこころ」と題して，裏千家ホームページには，茶道が総合芸術であるとされる所以について次のように述べられている.「茶道は日本のさまざまな伝統文化を集成した総合芸術だと言われています．現代において社会や家庭，また教育の現場からも失われつつある日本の伝統を受け継ぐとともに，古来の風習や習慣，地域の風俗なども大切に残しているからです．また，一服の茶を通じて，もてなす側ともてなされる側がいて，これを茶道では亭主と客と言いますが，両者が心を通わせ合う時間と空間を共有するところに茶道の良さがあります.そこは,年齢や性別,人種を越えて互いに相手を思いやる場となります. 茶道はそのような精神性を大事にしながら，美術工芸品に関するさまざまな美学をも取り込んでいきます．茶道のこのような特徴が総合芸術だと称される理由であるといえるでし

ょう.」（裏千家ホームページ参照．閲覧日：2023 年 9 月 10 日）
https://www.urasenke.or.jp/textb/shiru/spirit/

（注 28）文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示)』によれば,「現代的な諸課題に関する教科横断的な教育内容」を学ぶ手立ての一つとして「伝統や文化に関する教育」が位置づけられている．また，それは各学校がそれぞれの教育目標や生徒の実態を踏まえた上で，カリキュラム・マネジメントの一環の中で工夫・実践することが推奨されている．

文献

1）C・ファデル，M・ビアリック，B・トリリング著，岸学監訳『21 世紀の学習者と教育の 4 つの次元―知識，スキル，人間性，そしてメタ学習―』p.44，北大路書房（2017）
2）C・ファデル，M・ビアリック，B・トリリング著，岸学監訳，同上書，p.44

令和５年（2023）10月16日受理
令和５年（2023）12月31日発行